

後期中新世アフリカの霊長類進化に関する研究動向

オーガナイザー：中務真人

ゴリラ、チンパンジー、ヒト系統の分岐は、後期中新世におこった。東アフリカでは、約 2000 万年前から 1200 万年前まで、ある程度連続的には乳類化石産地が存在するが、後期中新世の化石産地が乏しく、サンプルビテクスの発見を除けば、この時代のアフリカ霊長類進化をめぐる研究は停滞していた。しかし、近年、エチオピアのチョローラ、ケニアのナカリでの調査により、大型類人猿を含む霊長類化石資料が次第に充実し、1000 万～800 万年前にかけての霊長類進化動向がようやく垣間見られるようになってきた。このシンポジウムでは、こうした調査から得られた最近の知見について話題提供し、今後の展望を考えてみたい。

講演

國松豊 東アフリカ後期中新世化石産地ナカリから新たに発見された大型類人猿化石

中務真人 後期中新世における狭鼻類系統の興亡について

諏訪元 チョローラ層の年代層序と霊長類を含む動物相

仲谷英夫 東アフリカにおける後期中新世哺乳類動物相の変遷とその古環境

東アフリカ後期中新世化石産地ナカリから新たに発見された大型類人猿化石

後期中新世（990 万-980 万年前）のナカリ累層からは、これまでに大型類人猿化石としては、*Nakalipithecus nakayamai* の下顎片と幾つかの遊離歯の他に、これとは明らかに異なり、より原始的な特徴を残す上顎 P3 が 1 本知られていた。これらに加えて 2016 年夏のナカリにおける野外調査で、新たに大型類人猿の上顎 M3 を発見した。咬頭が低く著しく痩せている点など、すでに知られている *N. nakayamai* の上顎大白歯とはかなり形態が異なる。今回は、この新しく見つかった大型類人猿の標本について紹介する。

後期中新世における狭鼻類系統の興亡について

前期・中期中新世のヒト上科は、現生種に比べ特殊化の程度が低い「原始的」類人猿であった。後期中新世には、こうした原始的類人猿から、ゴリラ、チンパンジー、人類系統がそれぞれ特殊化をしながら誕生した。一方、原始的ヒト上科系統は、こうした現生系統とただちに入れ替わったのではなく、時代的重複があった可能性が示唆される。小型の狭鼻類においても、漸新世・前期中新世に遡る原始的系統は、1200 万年前には絶滅したと考えられていたが、ナカリでは数系統が、すでに放散を始めているオナガザル科とともに発見されている。

狭鼻類大系統の交代は、霊長類進化上、後期中新世の大イベントだが、その実態は予想より複雑である。

チョローラ層の年代層序と霊長類を含む動物相

エチオピアのアファール地溝帯の南西端に位置するチョローラ層の露頭は1970年代以来1000万年前ごろの数少ない哺乳動物化石産出地として知られていた。2007年のチョローラピテクスの発表の後、2010年から同層の新たな調査を進め、当初1地点しか知られていなかった化石地点を10地点以上に増すと共に、900万から700万年前ごろの人類起源期に相当する年代を持つことを明らかにしてきた。本発表ではチョローラ層の調査の進展と新たな知見について概観する。

東アフリカにおける後期中新世哺乳類動物相の変遷とその古環境

東アフリカの後期中新世は類人猿から人類への進化の時代であるが、1980年代に発見されたサンプルピテクスを除くと類人猿化石の空白があった。2000年代になるとケニアだけでなくエチオピアからも類人猿化石が続々と発見され、これらの系統関係や古環境を解析する上で、共産する哺乳類動物相の解析が重要である。この時代の東アフリカは現代型哺乳類動物相の出現で特徴づけられ、ユーラシア西部の哺乳類動物相との交流や地球環境変遷との関係が指摘されており、分類群毎の詳しい系統解析や、古環境の違いが、地球規模の環境変遷によるものか、地域的な環境の違いを反映したものかなどについての詳しい解析を進める必要がある。